

ふるさと
故里に父母は嘆きて在すなり 無実を叫ぶ吾を信じて

石川一雄さんが、自分の想いを短歌に託して作歌を続けておられたことは、よく知られていますが、このたび石川さんの短歌から40首を選び、「石川一雄短歌に託して」と題した本が、解放出版社から出版されました。

解放新聞埼玉版に2022年から連載されていたものを中心に、獄中での短歌が20首、仮出獄後の短歌が12首、連載未発表短歌が8首、掲載されています。それぞれの短歌に、石川さんが自分の想いを語った文が添えられています。

冒頭にあげた短歌は、獄中短歌のうち19番目に掲載されたものです。

次のような石川さんの言葉が添えられています。一部引用します。

『(一部略) おふくろとおやじは、俺を信じて、小さな身体で、あっちこっちに行って「一雄は無実です！」と訴えていたと聞いた。ウメ子さん(義理の姉、六造兄貴の妻)が、二人の手を引いて集会に行ったこともあったと聞いた。

おやじが死んだと聞いた時は、ああ、死んじゃったかと思った。俺を学校に行かせてほしかった、とひとこと言いたかったなあ。一晩中起きて、亡くなったおやじに手紙を書いた。まじめで頑固だったおやじが浮かんできた。おふくろの時には、倒れて四日間起き上がれなかった。優しいおふくろが大好きだった。

おふくろの追悼集会に向けて、めんめんと文章を書いた。やるせなかった。力が抜けてしまった。飯もほとんどのどを通らなかった。おふくろには生きていてほしかった。』

「俺は母ちゃん子だった」とも話しておられた石川さんの、お母さんを亡くされた痛みの大きさが伝わります。

片岡明幸さんが「石川一雄の苦悩と葛藤」と題して書かれたあとがきも、心のこもった文章です。その中で片岡さんは、『(狭山事件の集会や学習会で石川さんは、)決して弱音を吐くようなあいさつや発言をしなかった。(中略)しかし、石川さんには、また違った側面もあった。(中略)弱さや悩みを抱えながら生きてきたという面である。彼のつくった短歌には、そういう心情を詠んだものが少なくない。それで、短歌をつくったときの気持ちを、聞き取りの形で記事にしようと思い、新聞の連載記事を企画した。』と書かれています。

狭山差別裁判の第4次再審請求が始まりました。石川さんはもちろん、ご家族を始め亡くなられた方もふくめ、多くの方の想いものせて再審請求はあるのだと思います。